

足元の災害
リスクを知る

認定特定非営利活動法人 防災・減災サポートセンター

ぼうさい・げんさい ニュースレター

被災者ゼロを目指して

2026.1.1発行（年4回） vol.18

防災・減災サポートセンターの目的

この法人は、不特定多数の市民・団体に対して、科学技術分野で助言・提案を行い、社会教育、地域づくり、地域安全、災害救援の支援、科学技術の振興の寄与に関する事業を行い、そして公益の増進と自然災害の防災・減災に寄与することを目的としています。

活動報告

- ・第6回運営会議 2025年10/18（土）
日立システムズホール仙台 会議室3
2025年市民防災・減災講習会の対象地区の青葉区作並岩谷堂西地区について地形地質の検討を行いました。⇒現地調査（11/22予定）を行う予定です。
- ・岩谷堂西地区現地踏査 2025年11/22
実施 6名参加
- ・第7回運営会議 2025年12/5（土）
日立システムズホール仙台 会議室2
岩谷堂西地区の市民防災・減災講習会について検討しました。

今後の予定

- ・2025年第8回運営会議；2026年1/17(土)
日立システムズホール仙台
- ・仙台防災未来フォーラム2026年
2026年3/14 仙台国際センター
タイトル；地域の特性を知って自然災害へ備える

連絡先電話番号を変更しました。

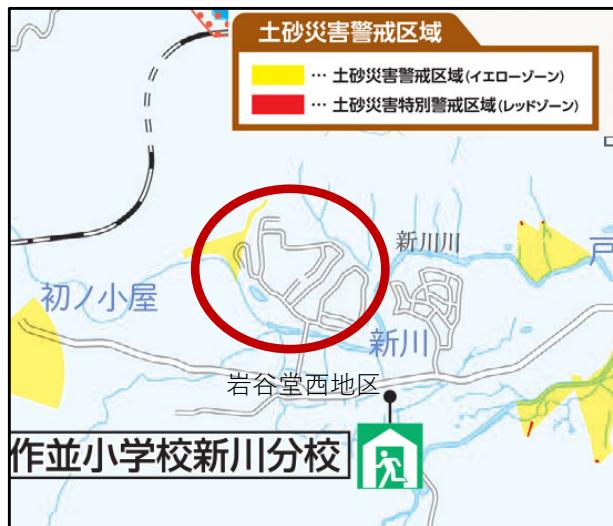
従来の固定電話を解約し、携帯電話を契約し経費の節減を図りました。これに伴い、FAXも廃止しました。お手数ですが、メールでご連絡をお願いします。
新しい番号は以下の通りです。

090-5161-4940

岩谷堂西地区の現地踏査

岩谷堂西地区は約50年前に開発された住宅団地できれいな空気とおいしい水が売り物です。戸数は132戸程度です。団地の北側に新川川の支川の沢があり、このうち最も西側の沢は土石流の土砂災害警戒区域（イエローボーン）に指定されています。しかし、警戒区域に指定されていない沢でも今後の雨の状況によっては土砂災害が発生しないとは言い切れませんので、実際の現地状況を確認して検討することにいたしました。

今後、踏査の結果を検討し、地区の住民の方にご説明する予定です。



備えは大丈夫? ～後発地震注意情報とは～

2025年12月8日23:15 青森県東方沖で M7.6の地震が発生し、八戸市では震度6強のゆれを記録しました。

これまでの研究で、日本海溝・千島海溝沿いの領域で規模の大きな地震が発生する（先発地震）と、その地震の影響を受けて新たな大規模地震（後発地震）が発生する可能性が高まると考えられています（図-3）。そこで、この大規模地震が起こると想定されている範囲でMw 7.0以上の地震が発生した場合、または、その周辺でMw 8.0～9.0の大規模地震が起きて、想定震源域に影響を与えると評価された場合に、「北海道・三陸沖後発地震注意情報」が発表されます。（Mw;モーメントマグニチュード）

ここでは気象庁や海洋研究開発機構（JAMSTEC）の資料を基に、解説いたします。北海道・三陸沖の地震・津波については、これまでいろいろな研究者が過去の文献、現地調査、シミュレーションなどで研究を重ね、メカニズムや被害想定を行い、後発地震の注意情報などに反映されてきました。その成果から今回の注意情報に関する部分の概要をお知らせしたいと思います。

海溝型地震は、図-1のようにプレート境界などで断層すべりが起きて、面的にずれることによって発生します。地震のゆれはこのずれによって生じます。また、津波は海底の隆起に伴って発生します。震源はそれが始まった場所で点として表されますが、地震そのものは震源から広がった面的な断層すべりです。

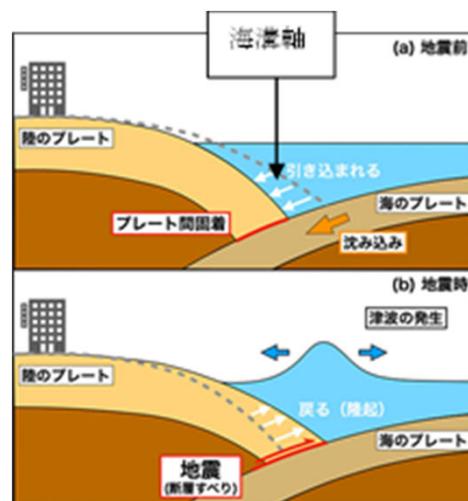


図-1 海溝型地震発生のメカニズムの概念図(海洋研究開発機構JAMSTEC, 海と地球の情報サイトより)

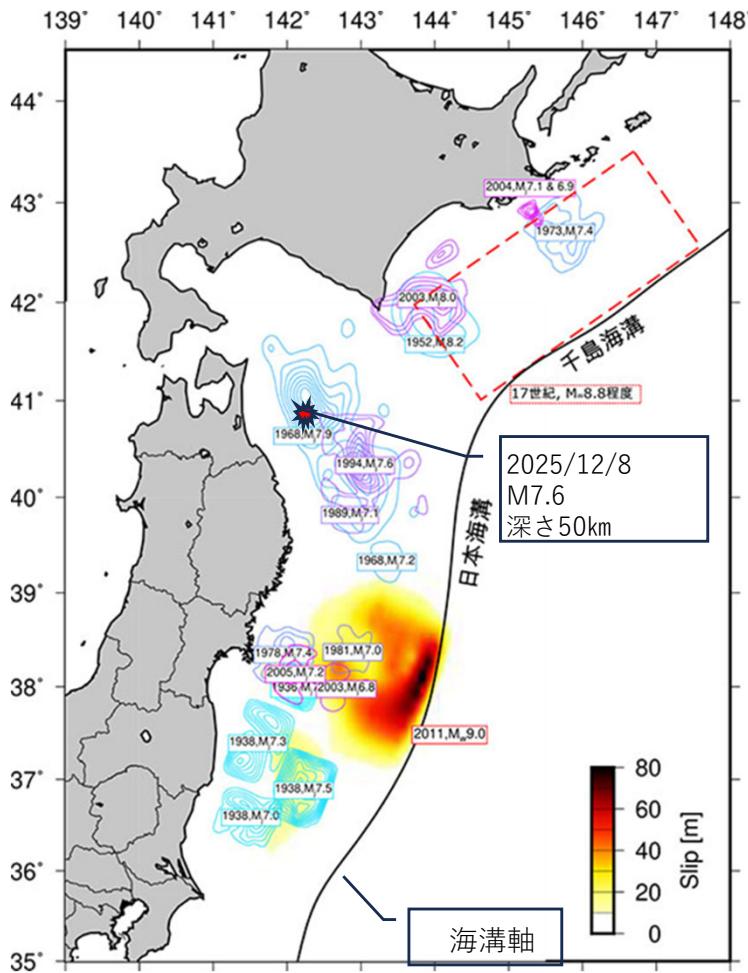
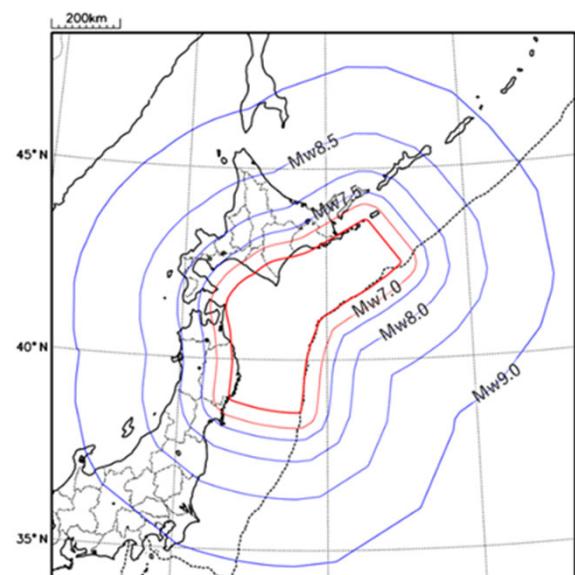


図-2 日本海溝・千島海溝沿いで発生した主要な海溝型巨大地震の地震時すべり域（海洋研究開発機構JAMSTEC, 海と地球の情報サイトに加筆）

日本海溝と千島海溝の平面的な位置と、主要な海溝型巨大地震の地震時すべり域を図-2に示しました。カラーの部分は2011年東北地方太平洋沖地震のずれの範囲です。地震研究推進本部（文部科学省）による長期予測では、三陸北部と十勝・根室沖では、図-3に示すように発生した先発地震のMwの大きさでその影響があると考えられる範囲が広がります。このような条件を考慮して、三陸北部～十勝・根室沖の後発地震情報の発表を検討しています。

過去100年（1904～2017年）の北海道・三陸沖の地震で今回のような後発地震の条件①北海道の太平洋沖から東北地方の三陸沖の巨大地震の想定震源域及びその領域に影響を与える外側のエリアでMw7.0以上の地震が発生した場合、②想定震源域の外側でMw7.0以上の地震が発生した場合は、地震のMwに基づき想定震源域への影響が評価され、影響を与えるものと評価された場合に後発地震注意情報が発表されます。

後発地震の発生は過去の世界の地震の発生状態（図-4）から、直後の発生頻度が最も高く、先発地震の7日後には発生頻度がかなり小さくなるようです。したがって、注意情報は地震が起きなければ、7日程度で解除されます。



※ 想定震源域（太い赤線）に影響を与えると考えられる範囲の広がりを「宇津の式」を用いて算出し、モーメントマグニチュード（Mw）ごとにコンターを描画。

図-3 想定震源域（赤枠線）に影響を与えると考えられるモーメントマグニチュード（Mw）ごとの広がりの範囲

また、三陸北部～十勝・根室沖の地震発生の実績によれば2.3年に1回程度が、その条件に該当するようです。つまり今後も、2年に1回程度の後発地震注意情報の発表があるかもしれないという事になります。私たちの備えとして、この情報はどのようにとらえたらよいか迷う情報ですが、起きた時のことを考えれば、地震や津波に対する準備をすることが最善です。また、1週間たったからもう来ないとは言い切れないで、地震が起きなったときの情報は防災・減災用品、避難路、避難場所、避難時の防寒・暑さ対策などの

チェックをする良い機会ととらえ、いろいろな点検をしておくことが大事なことと考えます。

参考

・「北海道・三陸沖後発地震注意情報」の発表基準；気象庁HP 知識・解説
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/jishin/nceq/info_guide.html 2025/12/28閲覧

・海洋研究開発機構；研究者コラム 三陸沖北部、十勝・根室沖での海底地殻変動観測の開始～海域で将来起こりうる巨大地震を調べる～
<https://www.jamstec.go.jp/j/pr/topics/column-20210303/> 2025/12/28閲覧

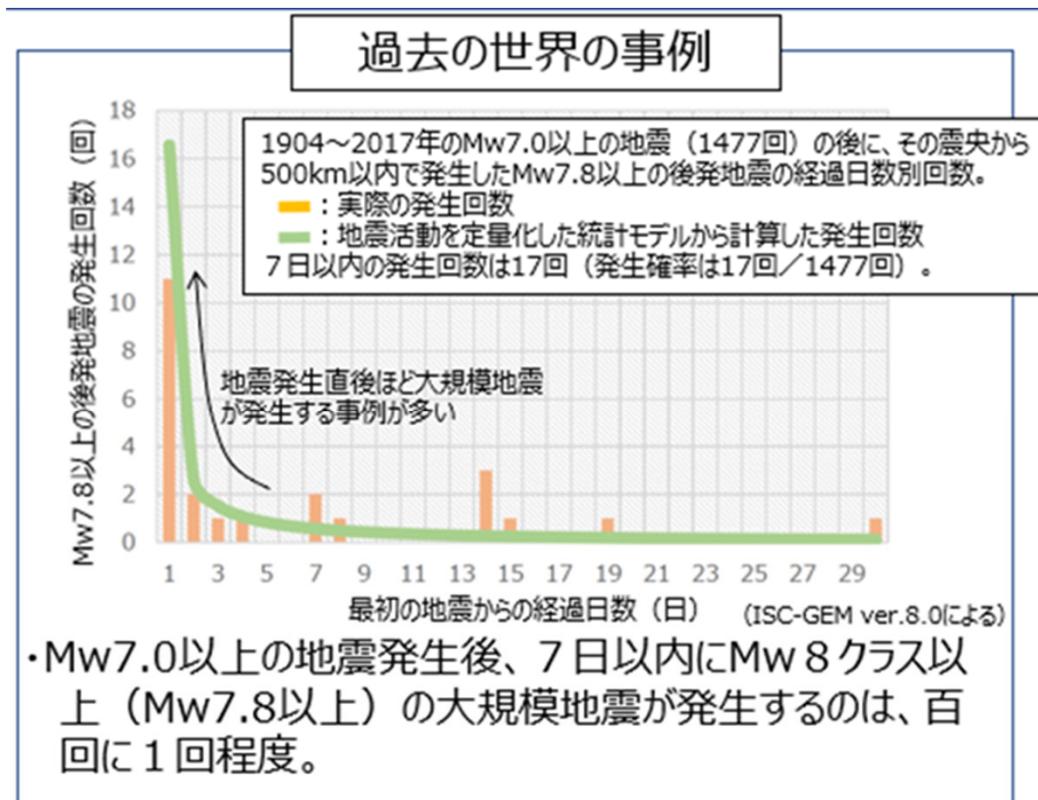


図-4 Mw7.0以上の地震の後で、その震央から500km以内で派生したMw7.8以上の後発地震の経過日数別の発生回数
(内閣府;令和7年12月8日23時15分頃の青森県東方沖の地震について(第10報)より)

・内閣府；令和7年12月8日23時15分頃の青森県東方沖の地震について（第10報）
https://www.bousai.go.jp/jishin/nihonkaiko_chishima/hokkaido/pdf/251216_siryo1.pdf
2025/12/28閲覧

クマ大変ヒト迷惑～目先の対応だけで済むのか～

連日、各地でクマ出没という報道が続いています。特に東北や北海道での農作物、人畜への被害は深刻の度を越えています。専門家は、この状態は決して一過性のものではなく、その度合いは増して濃密になるとも言われていて、人が生活域を放棄する事態になりかねないとも言われています。いまはクマが目撃されると、駆除するという方法で対応してきています。このようなことが起きている背景にはクマのエサ環境や学習能力が強調されているためだと思します。駆除の徹底を主張される意見の一方で、「安易な駆除よりも棲み分けの方法を探れ」「森林環境の保全に力を入れるべきである」という意見もあります。これらは野生動物を管理するというよりも共生するためにはどうすべきなのかだと思います。それには、理性的に自然と共生した暮らし方ができるのかを、我々ができることや行政がすべきことを明確にして、それらをサポートするために研究や教育、意識啓発を

継続して実践していく必要がありそうです。これまでの目先の対応は当然ながら、起きないように、起きても最少の被害で済む中長期的な実践プログラムを持たなければならぬのだと思います。これまでの人の暮らし方に少しずれが生じているのかもしれないというところを切り口にして、先人の自然との付き合い方、モノを盾にした勝手で横暴な人間の暮らし方について再考する必要がありそうです。そういう意味では、自然災害もクマによる被害も根は同じような気がしていて、自然に対する関心が薄れているということなのかもしれません。何かあっても金とモノで何とかなるという対応は、万能でもなく万全でもないということを学ぶべきです。まずは、これまでの経験をしっかりと情報共有することに一人一人が心がけるべきで、生活ごみや食糧管理の徹底、情報のキャッチと伝達方法に苦心しなければなりません。行政としても、各機関との一元化に向けての連携を図って人材の養成に取り組む必要がありますが、市民への防災教育という面に早急に力点を置いてほしいと思います。クマとの共存は生態系の調和という点からも必要なことであり、今回のクマ被害を契機に改めて我々の暮らし方が問われているような問題意識を持つことなのかもしれません。邪魔物は消せというような単純な思考では、人間自体が邪魔者になってしまいます。

繰り返しにはなりますが、何ができる、何をなすべきなのかを明確にしたうえで、継続したプログラムを実践していくことが基本となるのかなと思います。そのためには、自分たちが暮らしている自然環境に対して深く、広い关心を持つこと、持たせるような教育が必要だと思いますし、調和、共生するために負荷を与えない暮らし方、見方、考え方を指向すべきであると思います。

われわれは、科学技術の進展というか進歩で快適、利便性の良い暮らしに酔いしれていますが、その先にはということはあまり考えていません。気づかないだけで、なにか望ましくない道を歩いているような気にもなります。今回のクマ被害の拡大に対して思い通りに動かすという科学技術の発想は自然に対しては通用しないということを一層深めることになったような気がします。それを一時のこととて、目の前からなくなればよいという対応では、いずれ大きな負荷になって返ってくるということは杞憂なことでしょうか。

自然災害への対応の基本は、自分たちの暮らしているところの環境を理解して、負荷を与えないような工夫や発生の前兆に敏感になるということですが、そういう見方からすれば、クマ被害のその背景を見れば共通した自然への関心の深さであるということにもなると思います。

会員募集

特定非営利活動法人防災・減災サポートセンターでは、一緒に活動していただける会員を募集しております。また、いろいろな制約で一緒に活動できない方は、賛助会員としての参加も大歓迎です。

年会費 3,000円（入会金はありません）

お申込み方法

入会申込書に必要事項を記入して、事務局にメールまたは郵送などでお送りください。

（入会申込書は、下記のURLの「入会ご案内とご寄付のお願い」の「入会ご案内」の様式、内容でお願い致します）

2025年12月現在

正会員20名、賛助会員23名

賛助会社 2社



発行；認定特定非営利活動法人
防災・減災サポートセンター
住所；宮城県富谷市ひより台2-11-3
電話；090-5161-4940
URL；<https://bousai-support.or.jp/>
メール；info@bousai-support.or.jp